

スモールトークの公共性 —アメリカ社会におけるおしゃべりとその詩的機能をめぐって—

井出 里咲子

1. アメリカ社会の公共のおしゃべり

男性1 : I like your hat.

男性2 : I like your shirt.

これはある休日、親子連れで賑わうアリゾナ州の子供博物館で筆者が耳にした会話である。博物館の休憩室で家族とともに椅子に腰掛けていた男性1が、近くに立っていた男性2に、突然“I like your hat”と話しかけている。話しかけられたことに気付いた男性は、そこですかさず“I like your shirt”と相手に返しているのだが、二人がニコリと微笑み合ったところで、男性1は再び家族の方に向き直り、男性2もまるで何事もなかったかのように振る舞っている。この時の二人の男性は、いずれも地元のプロ野球チーム、アリゾナダイヤモンドバックスのロゴ入りの服装を身につけていた。

次はアメリカ国内線機内での離陸前の光景である。三人がけシートの隣同士にたまたま乗り合わせた二人の乗客が、到着地で行くべきレストランはどこか会話をし始めた。その会話に横で読書をしていた別の乗客が参入し、その後、三人の会話の盛り上がりを受け、一列後ろの席に座っていた四人目の乗客が、前列に身を乗り出して会話に加わった。四人は時折笑い声をあげながらおしゃべりをしてしたが、しばらくして後列の乗客が会話から抜け、次に読書をしていた乗客が再び読書へと戻り、会話は最初に話し出した二人の会話へと戻っている。

同じく、アメリカ国内線の客室乗務員と乗客の間のやりとりである。ここでは、ある女性客室乗務員が男性客から受け取ったスーツの上着をハンガーにかけていたところ、別の男性客がそのスーツに手を伸ばし、捲れ上がっていた袖口を直した。それを見た乗務員は“Thanks”と礼を述べた後、すかさず“Do you also want to press it?”（ついでにプレスもします?）と微笑みながら言い、それを受けて男性客と周囲に座っていた乗客たちが朗らかに声を上げて笑い、離陸準備のため客室乗務員が忙しく立ち回る機内の空間が、一時的に和やかな雰囲気包まれている。

博物館や機内といった公共の場所で、たまたま出会った見知らぬ人と言葉を交わすことは特に珍しい経験ではない。しかしながら、筆者の遭遇した冒頭の場面を日

本社会に当てはめると、博物館のような公共の場で見知らぬ相手の所持品を褒めるという行為や、機内ですでに始められている面識のない二者会話を割り込むという行為は普通憚られるように思われる。さらに、客室乗務員の“Do you also want to press it?”という発言は、客に当たる乗客を、他の乗客が同席する公衆の面前でからかいの対象にしているようにも見受けられる。普段親しい関係にある人や仲間内、またこれから関係性を深めようとしている相手に対し使われる軽口や皮肉めいたからかいが、なぜこうした公共の場面で、しかも一時的な関係しかもたない相手に用いられるのであろう。

ここでみた三つの事例は、いずれもアメリカ社会の公的場面において自然に生じたおしゃべりだが、いつ、どこで、誰と、どのような形式でことば交わせるのかを考える時、我々はこうした会話がただ漫然と自然に発生するのではなく、ある特定の社会文化空間に身を置く際に人々がとる一定の身構えを映し出すことに気づかされる。ここでいう「身構え」とは、コミュニケーションの成立に不可欠な、基本的な前提としての「ある種の協調的な準備状態」(北村 1988: 46)を指す。では、上記のようなアメリカ社会の公的場面におけるおしゃべりの背景に、私達はいかなるコミュニケーション上の身構えを見出すことができるのだろうか。

本稿では、アメリカ社会の公的な場を共有する見知らぬ人々の間に生じるおしゃべりや雑談の類をスモールトークとした上で、スモールトークを特定の相手や関係性、場面に向けたスタイルとしてではなく、アメリカ社会の公共性の概念に立脚した規範意識や理念に裏打ちされたスタンスとして捉える。そのために本稿では、まず実際のスモールトークのやりとりの中に生じる型としての平行体やくり返しに着目し、その詩的機能についての分析を行う。次に、スモールトークが場の参与者により協働で創出される場所としての公共性の特質について論じ、社会言語学・言語人類学における会話をめぐる諸概念の中に、文化的モデルとしてのスモールトークを位置づけることを試みる¹。

2. おしゃべりとしてのスモールトークとは

アメリカ社会におけるスモールトーク (small talk) とは、“polite conversation about unimportant or uncontroversial matters”²などと定義されるように、些細で取るに足らない「ちょっとしたおしゃべり」や「雑談」の類を総じて指す。こうしたおしゃべりは家族、友人、同僚といった親しい相手や顔見知り同士のほか、初対面の相手やその場限りの一時的な出会い、また医者と患者の会話といった制度的場面においても生じる。そもそもスモールトークの研究は、ことばの交感性 (phatic

communion) に着目したマリノフスキー (1927) の研究を起点とし、日常的なあいさつや天気の話、ゴシップといったおしゃべりが、情報伝達や合意形成のみならず、対人関係の維持や確認、話者間の親密性の指標のために機能することが報告されてきた (Laver 1975; Cheepen 1988; Schneider 1988 等)。こうした日常談話としてのスモールトーク研究の一方で、特に 90 年代以降は、制度的談話や職場談話でのスモールトーク研究が盛んとなり、市場やスーパー、酒屋といった商業施設、ビジネスミーティングといった場面におけるおしゃべりの話題や構造分析、およびそれを支える規範意識に関する研究が盛んになっている (Lindenfeld 1990; Bailey 1997; Coupland 2000; Murata 2013 等)。

井出 (2005, 2008) は、アメリカのテキサス州にある系列コンビニエンス店と個人経営の花屋で録画された店員と客のやりとりの分析から、サービス業の制度的な制約を伴う状況下で、いかにスモールトークが生じるかを分析している³。ここでは店員と客としての役割意識に基づいたやりとりにおいて、店員と客の双方による協働での自己開示 (self-disclosure) を通して共通の話題が提示され、一時的なフレームシフトの形でスモールトークが創発 (emerge) される過程が分析されている。ここでいう自己開示とは、相手に個人的情報や体験、その時々を考えや気持ちを表出、伝達する行為であり、ポライトネス理論において「相手に受け入れられ相手を喜ばせたい、相手に理解をしてもらいたい」という積極的欲求を満たすコミュニケーションの方略である。その際、場の参加者は既存の場の性質や発話の意味内容だけでなく、声の強弱や韻律、視線や身体の向きといったパラ言語を拠り所にコンテキストを再解釈し、サービスエンカウンターという制度的場面でありながら、協働でスモールトークを生み出す様子が見て取れる (井出 2008: 189)。

先の身構えという観点から考えると、こうしたアメリカ社会の公的場面でのスモールトークには、ある特定の相互行為領域に対するスタンスが刻み込まれていると考えることができよう。DuBois は社会的行為者がコミュニケーションを通して相互行為的に達成する公的な行為 (public act) を、総じてスタンス (stance) と呼んでいる (DuBois 2007: 163)。スタンスはスタイル (style) の下位区分とも構成要素ともされ、スタイルが様々な変種の中から、話者がジェンダー、階級、エスニシティといったマクロアイデンティティ表出のために、相手や場面に合わせて選ぶ選択肢である一方、スタンスはより詳細に、評価、感情、認識、同意的な話者の立ち位置などの表出と捉えられる (Jaffe 2009: 14)。またこうした話者のスタンスは、スタイルと同様に、音声、語彙や文法等の言語行動、笑い、表情、身振りなどの非言語行動、さらに共同発話などのターン構造から実現される。

以下に、コンビニや花屋で収録された会話データの分析を中心に、店員と客とが制度的な会話を交わす中に、自己開示を通してスモールトークが創出される箇所を

分析するが、本稿では特に、相手の発話形態に自分の発話形態を合わせた平行体や、自分の発話や相手の発話をくり返す詩的表現がスタンスとして機能する場面に着目する。

3. 平行体とくり返しの詩的機能

冒頭でみた博物館での男性のやりとりでは、男性1の褒め言葉 (I like your hat) に対し、男性2がその文構造の一部を変化させた平行体を用いて返答している。男性2は、ここで相手からの褒めを受け入れて“thanks”などと礼を言うこともできただろうが、男性1が同じ野球チームのファンであることを見て、“I like your shirt”と、平行体を用いた返しをしている。

レトリックとしての平行体 (parallelism) は、会話の中で類似した語句や文章の形式を用い、会話全体の中に一定のパターンを構築し、会話の意味内容を強調し、またやりとりの中に一つのリズムを作り出す。同様に会話の中のくり返し (repetition) は、表現やフレーズのくり返しや韻を踏む音節、文章等の繋がりを指し、話し手の意図の強調、確認、説得や解説のほかに、沈黙の回避、フロア取りといった機能をもつ (Tannen 2007)。さらに、上記のやりとりにみられるような相手の発話形態を引き継いだ協働の平行体やくり返しは、話者同士の発話が響き合うリズムとしての響鳴 (resonance) を生み出す。たとえば次の例は、タクシーの乗客と運転手の間で取り交わされたやりとりであるが、タクシーを降りる際、開かない方のドアを誤って開けようとした乗客の言い訳めいた発話に対し、運転手は相手の発話に韻を踏ませ、かつ *slow learner* と *late bloomer* という表現の意味的対立をさせた返答をしている。

乗客： I'm a slow learner.

運転手： But you must be a late bloomer.

(Sherzer 2002: 107)

博物館でのやりとりも、タクシー下車の際のやりとりも、共に公共の場面で一時的に空間を共有する二者の間に交わされた短いやりとりであるが、いずれも相手に対する褒め (I like your hat) や言い訳 (I'm a slow learner) が *I* で始まる自己開示の形式をとっており、その発話に対して対話者が平行体の形で返答しているところに同調のリズムが生まれている。同じ公的場面であるコンビニや花屋といった制度的会話の中にも、こうした平行体やくり返しはしばしば現れるが、以下にアメ

リカのテキサス州のコンビニと花屋で録画された店員と客のスモールトークから、くり返しや平行体が、会話の中に笑いを生じさせるコンテクスト化の手がかりとして機能する過程を分析したい⁴。

最初の例は、コンビニのレジカウンターで頭痛薬を求めてきた客に対し、店員が同じ製品のジェネリック版の価格について説明し、どちらを希望するかを客に尋ねている場面である（6、7行目）。8行目で客は頷きながらジェネリック版の購入を示唆しているのだが、9行目で店員は二つの製品が同じもの（成分）であること、さらに11行目でそれが法律上の取り決めであること説明する⁵。

- 04 客： do you have Advil?
 05 (10.00) ((店員は前に来た客の商品のレジ打ちをしている))
 06 店： ahm (.) you want the actual Advil for three fifty nine or do you want the
 07 generic for three o ▮ nine=
 08 客： ▮ three- ((頷く))
 09 店： =same stuff
 10 客： really
 11 店： yeah by law it has to be
 12 客： yeah go ahead I'll= ((棚のジェネリック薬品を指さしながら))
 13 店： =yeah >FDA regulates that ibuprofen is ibuprofen is ibuprofen<
 14 ▮ huh (.) by law it has to be
 15 客： ▮ *hahahaha*

11行目の説明を受けて、客はジェネリック版の購入を希望するのだが、ここで店員は畳み掛けるように食品医薬品局（FDA）がイブプロフェンを管理していることを説明し出す。13行目のこの発話は、それまでの店員の口調に比べ明らかに早口で、ibuprofen is ibuprofen という表現を強調的にくり返した上で、“huh”と一息入れてから11行目の“by law it has to be”という自らの説明を再びくり返している（14行目）。

店員のくり返しを伴う発話（13、14行目）は既出の情報のくり返しに過ぎず、特に情報伝達上の意味をたない。しかし、このやりとりにおいて店員は結果的に客から笑いを引き出し（15行目）、商品の売買を軸とする制度的会話の中に一時的なフレームの揺らぎを生じさせている。店員による11行目の“yeah by law it has to be”という発話は、店員の店員としての制度的役割意識から発せられた商品説明のための発話と解釈できるだろう。しかし、13行目のFDAを主語とした発話では、そこに用いられるくり返しが、FDAのお役所としての生真面目さを大袈裟に描写

し、よって11行目と同じ発話内容である14行目での“by law it has to be”が、食品医薬品局という権威を茶化し、嘲る発話内容に転化されている。そのため、ここでのくり返しは、店員の制度的な役割をその場から切り離し、一時的に客と店員の立場を（FDAというお役所に対して）並列に置くフレーム作りの上で機能するのである。

次に見るのは個人経営の花屋のレジカウンターにおける店員と客のやりとりである。このやりとりの直前で、店員はつり銭を数え間違えたと勘違いして客に謝罪している。その謝罪に対し客は、店員のつり銭の返し方⁶を習ったことがないことを自己開示し（105行目）、店員の謝罪を緩和している。

- 105 客： ⊥I never learned how to do that
 106 (2.0)
 107 店： I know I did (.) >but don't need to do that now I don't have to
 count<=
 108 客： =I know- (.) I don't have to- count
 109 店： I don't have to count anything=
 110 客： =thank you= ((微笑みながら身体の向きを変える))
 111 店： =sure ((微笑む))

105行目の客の自己開示に対し、2秒ほどの沈黙の後で、店員自身もつり銭の数え方を知っていたけれど、今では数えなくてもいいという内容の自己開示に出ている。この時の店員の発話は、早口で目線を床に落とした投げやりな口調であり、さらに「今じゃ数えなくてもいい」という発話内容も、店員の仕事内容やその場の状況とは矛盾している。しかし、店員と客の役割範疇で進行していたそれまでの会話は、“I never learned how to do that”／“I know I did”という、客と店員協働による自己開示を通してフレームシフトを起こしている。107行目の店員の発話内容に対し、客はただ笑って対応することもできるのだが、ここで客は間髪入れずに“I know, I don't have to count”と、店員の発話内容を少し強調する発音でくり返し（108行目）、さらにこの返しを受けて店員も再度、“I don't have to count”をくり返している（109行目）。

会話におけるくり返しには、自らの発話内容をくり返す自己反復（self-repetition）と、相手が言ったことをくり返す他者反復（allo-repetition）とがあるが、このやりとりでは、相手の発話内容をくり返す他者反復を店員と客の両者が用いることにより、107行目から109行目のやりとりが、テンポよく互いの発話が連鎖するかのごとく進行している。また、109行目の店員による“I don't have to

count”は、二回繰り返されたこのフレーズに anything を付けることにより、やりとりのオチとして機能し、この時点で客と店員は微笑みを交わしてやりとりを終了させている。

ここでは、「つり銭を数え間違えたと勘違いする」という、店員の面目 (face) を脅かす行為 (FTA) を回避しようとする動きの上で、客が自己開示に動き、その動きに呼応する形で店員も自己開示をしたところに協働のくり返しが立ち現れている。こうした協働のくり返しは会話の中に同調のリズムを生み出し、その同調性が認識される中に、場の参加者がこの場を共有しているという一種の共在感覚が生み出されているのである (井出 2008: 185)。こうした協働のくり返しが生み出す響鳴と共在感覚は、参加者がそれぞれの制度的役割を超えてその「場を共有している」ということを体感させる。同時に、くり返しと平行体が生み出すリズムは、110、112 行目に見るように、会話を冗長にせず端的に終わらせ、やりとりの終了を指標する談話標識としての機能をも果たしているといえるだろう。

最後の例は、ガソリン代を払った客が釣り銭を待つ間、前回訪問時にポイントカード (stamp) を忘れたことを店員に切り出して、スモールトークを一方向的に開始している場面である。15 行目の客の自己開示に店員はあいづちを打ち、その後客は息子のために (ポイントとなる) スタンプを集めていることを開示している (18 行目)。19 行目と 20 行目で店員は客につり銭を渡し終えており、さらに 23 行目では他の客への対応を開始している。しかし、客はここでつり銭を財布にしまいながら、24 行目で再度、18 行目での自己開示の内容をパラフレーズする形でくり返している。

- 15 客: I forgot to get my - stamp last time (.) those're - =
 16 店: =uhu hnn
 17 (2.5) ((店員がレジを操作する))
 18 客: I save it for my - my son (.) I never use them (.) my kids get them=
 19 店: =yeah ((つり銭を渡す))
 20 客: °thank you° ((つり銭を受け取る))
 21 店: >°six'n thirty cents°< you're welcome
 22 (1.5)
 23 店: ▮ good morning ((別の客に向かって))
 24 客: ▮ I collect them they use them you know = ((つり銭をしまいながら))
 25 店: =yeah
 26 (3.0)
 27 店: my kids aren't (.) quite old enough to know what they are = ((他の客につ

- 28 り銭を渡しつつ))
 29 客: =mine are too old
 30 店: *he he he he*=
 31 客: =they're twenty four and twenty two an' they still get them((微笑む))
 32 ┌ *huh ha ha ha ha ha* ((かばんを手にし、身体の向きをかえながら))
 33 店: └ *he he he he hhh* see you later

二回に渡る客の自己開示に対し、それまでただあいづちを打つに留まっていた店員は、27行目で自身の子供たちについて言及する自己開示で客に応えている。こうして客と店員の協働による自己開示が達成されると、すかさず29行目で客が店員に応えているのであるが、“mine are too old”という客の発話は、店員の“my kids aren't quite old enough”という発話と意味内容が対立する平行体の形を取っている。この発話をきっかけとして30行目で店員は笑い出し、それを受けて客は、29行目の自らの発話をより具体的に説明し、“my kids get them”という18行目での自らの自己開示を、表現を替えてくり返している(“they still get them”)。

32、33行目で客と店員が笑いを共有している様子は、客の24才と22才になる子供たちが未だに親のすねをかじっているという説明の可笑しさがもたらした笑いだと解釈できるだろう。同時にここでは、以下のやりとりにおける自己反復と他者反復に用いられるくり返しと平行体が、やりとりの中に同調のリズムを作り出し、その同調のリズムの認識の証として笑いが共有されているとも考えられる。

自己反復 (1)	[I never use THEM] [my kids get THEM]
自己反復 (2)	[I collect THEM] [they use THEM]
他者反復 (1)	[my kids aren't quite OLD enough] [mine are too OLD]
自己反復 (3)	[they still get THEM]

さらにこのやりとりの最後で、客と店員とはほほ笑みと笑い声を共有しているのだが、客は32行目の時点で身体の向きを変えて出口に向かって動き出し、その客の背中に向かって店員は別れの挨拶をしている。先のつり銭の数え間違えの事例と同様に、ここでも会話における協働での自己開示がフレームシフトを引き起こし、そこにくり返しと平行体が会話のテンポを作り出し、さらに会話をリズムよく終了させるスモールトークにおける詩的機能が見て取れるのである。

4. 「普通」と「制度的」会話概念におけるスモールトークの位置づけ

本稿の冒頭でみた公共場面での人々のやりとりや、先の店員と客とのおしゃべりは、からかいや笑いを含む上でどこか親しげなイメージを想起させる。しかしこれらのカジュアルなやりとりは、いずれも公共性を帯びた場面で一時的に出会った他人同士の間で交わされるやりとりである。では、なぜ公共の場面でこうしたスモールトークは起きるのだろうか。スモールトークの身構えを考える上で、まずはスモールトークが普通の会話と制度的会話の両者にまたがって生じる理由について考えてみたい。

社会言語学、語用論、言語人類学における会話 (conversation) の定義を紐解くと、そこには会話を「日常的で普通の会話」と、そうでないものとしての「制度的な会話」とに大別する流れがある。スターバックスに代表されるようなコーヒーハウスでの会話領域の歴史的構築について論じた Gaudio (2003) は、西洋社会における会話概念の二項対立的な構造について総括している。たとえば Levinson (1983: 284) は、普通の会話 (ordinary conversation) を「制度的場面の外で取り交わされる二名以上の参加者による自由参加の話」(下線は筆者による) と定義し、また普通の会話は「実利目的でなく、話そのものを楽しむ」ものであり (Eggins and Slade 1997: 6, 19)、「より制度的なインタビュー、討論、会見、宗教儀礼などから区別されるもの」(Duranti 1997: 250) として認識されている。さらに Goodwin and Heritage は、普通の会話が、自然界の言語使用の本源的場 (primordial site) を構築し、より専門的コミュニケーションの場への出発点となると指摘する (Goodwin and Heritage 1990: 289)。このように、普通の会話は日常的、平凡、カジュアル、かつインフォーマルな変種であり、それゆえに無標・デフォルトの会話形態として認識されてきた⁷。これに対し、医療現場での医者と患者の会話、教室談話、法廷談話などといった制度的会話 (institutional talk) は、中核となる目的やタスクに基づく参加者の言動への制度的制限の中に特徴づけられ (Drew and Heritage 1992)、そのため普通の会話に比べ、より形式的、儀礼的、フォーマルで標準語の領域であるとされる。

「普通の会話」と「制度的会話」を区別する会話のパターンは、語彙の選択、統語、プロソディー、話者交代のデザイン、行為連鎖の組織などによるスタイル (もしくはレジスター) の違いに求められてきた。しかし先にみたように、スモールトークのようなカジュアルでインフォーマルな会話は、制度的会話の中においても生じる。このことは普通会話、制度的会話といった区分が理念上の区分に過ぎず、実際の会話はより入り組んだものであることを示している。たとえば McEhimmy (1997) は、アメリカ社会の女性警官のエスノグラフィーを通じて、権威的スタイルと日常的で

カジュアルなスタイルの双方が使われている様子を描写しつつ、「普通」と「制度的」な言語使用領域が実際には入り組んでいることを指摘する。その上で McEhimmy は、普通の会話をデフォルトと捉える問題点として、アメリカ社会における会話 (conversation) が同じアイデンティティを持つピアが、対等な立場で会話を行う場という文化的概念を前提としていることを指摘する (McEhimmy 1997: 111)。

ラボフの社会言語学調査などに明らかなように、アメリカ社会には階級意識があるが、そこでの対人関係上の実践は理論的には常に水平で、互いに対して平等であるとされる。「平等性」の構築は、誰にでもファーストネームを使う、率直である、形式的場面においてもジョークを使って儀式張らないなどといった談話上のスタイルを通して達成されるが、そこにはジェンダー、階級、人種などの異なりゆえ根源的に不平等な現実社会において、コミュニケーション行動を通して「平等」と「連帯」を指標する、能動的作業領域としての会話の場への身構えが浮かび上がる。さらに英語の会話概念全般を、社会的に平等な相手と行う自発的で形式張らないやりとりとした Cameron (2001) は、会話のフロア取りや話題の転換において、話者は平等の権利を有するというメタ言語的認識を持って会話に参加していると言及する。こうした「権利」としての会話は、同時に「義務」であり、平等性と連帯追求のために能動的になすべき務めとしてのワーク (work) というメタファーが構築する領域であることも指摘されて久しい (Katriel and Philipsen 1981)。つまり普通の会話と思われる会話も、実際には規範意識としてのイデオロギーを内包しており、生来、根源的に「カジュアル」「インフォーマル」「自然」などとされてきた会話の性質も、その規範意識の実践 (ハビトゥス) として捉えられるのだ。筆者がスモールトークの分析に際し、アメリカ社会で暮らすさまざまな人に、店先などでなぜスモールトークをするのかという質問をしたところ、次のような答えが返ってきた。“*I always like to small talk at checking stands because I want to show that we are equals. I know that they are standing there all day, doing boring repetitive jobs*” (テネシー州出身 20代男性)。“*I like people trying to relate to me, rather than standing there and taking your order*” (アラバマ州出身 20代女性)。こうした意見に、公共の場において、相手との平等と連帯を意識した会話への規範意識が読み取れるだろう。

5. 文化的モデルとしての公共のおしゃべり

普通会話／制度的会話という二項対立的会話観に加え、もう一つの言語意識を形作るのが Private と Public の概念である。欧米の近代社会は、理念的に「インフォー

マル、個人的、脱政治的領域」としての Private と、「フォーマル、制度的、政治的」な Public という空間的、倫理・道徳的な差異の言語イデオロギー実践の場として説明されてきた (Gal 2005)。ここでの Public とは社会的意思形成の基盤であり、社会階級や権力構造に関係なく保障される権利としてのコミュニケーションの実践領域である。ハーバマスの公共圏概念は、このコミュニケーション域が民主主義を政治的に実践するための社会統合のプロセスから生じたとされるが、この公共圏におけるコミュニケーション行為が、「個人が平等に自身の考えをもって行動する」というイデオロギーを孕んだ公的空間への身構えを育み、貨幣と権力にかわるコミュニケーションによる公共域の土台を形作った。たとえば Carbaugh (1990) は、アメリカのトーク番組における視聴者参加型の討論の分析を通して、公的場面での談話的特徴としての自己開示の重要性を説いている。自己開示は正直さ (honesty) や率直さ (openness) といった、社会における個人的資質のプラスの評価に繋がり、それがアメリカ社会を生きる人々の特権であり、義務として認識される。ここに理念として映し出されるのは、制度的規範や社会階層とは無関係な域において、個人と個人とを基軸に捉えた会話の概念であり、出自や社会的地位よりも論理性、正直さと率直さ、政治的平等性が支配する「市民」による発言の場 (Gal and Woolard 2001: 5) としての会話領域なのである⁸。

ここで、スモールトークの生じる公共場面を日本社会における会話の領域と比較して考えてみたい。日本の会話領域はしばしば人と人との関係性や、個人が置かれている社会的立場に根差して認識される。日本社会のコミュニケーション領域の概念は、三宅 (2011) に詳しい「ウチ・ソト・ヨソ」の範疇によって説明される。「ウチ」は、家族形態の小さい社会集団の領域で、日本社会に特有のレジスターとしての位相語が発達しやすい領域であるのに対し、「ソト」は敬語の使用が現れる、自己と社会的つながりや利害関係のある相手とのやりとりの領域である。一方、「ヨソ」は自己と直接的人間関係がない、もしくは一時的なつながりしかもたない領域であり、そこでは関係の不確実性と無関心という原理が働く。阿部謹也 (2004) の描く「世間」の概念は、「ソト」と「ヨソ」の領域にまたがり、人が置かれている立場や上下関係などの動かしがたい歴史伝統的システムが構築する、「変えられない<所与>のもの」としての認識領域である。よって特に無関心の原理が働くヨソの領域では、アメリカ社会に見られるようなスモールトークを生じさせる身構えは、必ずしも期待されていないと考えられよう。

これに対し、Hill (2001) や Gal (2005) は、アメリカ社会の Private/Public の概念が、関係や立場でなく、より「場所」や「空間」に根差して認識されているとする。その一例として、実際には立場も役割も異なる人々が集う場所としての「公共」の場では、見知らぬ人同士が、同じ社会空間を共有する上でいわば儀礼的に微

笑みを交わし、ジョークを言って笑い合うといった文化的モデルが存在するのだが、こうした公共性への身構えが、本稿でみたようなおしゃべりとしてのスモールトークを創発させているといえるだろう。

6. おわりに—スモールトークの身構えをめぐって

本稿では、アメリカ社会の公的場面におけるスモールトークにおいて、協働の自己開示と、くり返しと平行体の詩的機能に焦点を当て、やりとりの中に同調のリズムが創出され、互いの発話の間に響鳴が生み出される過程を分析した。こうした協働の自己開示や同調のリズムは、公共の場に一時的に会した見知らぬ人同士のやりとりの中に、ある意味擬似的な平等感や連帯感を指標する。さらに冒頭の事例での客室乗務員の「ついでにプレスもします？」という一言にも明らかのように、こうしたスモールトークは、公共の場における「乗務員と乗客」というような立場上の関係性を一時的に壊し、かわりにこの男性客の振る舞いを、「細やかな女性らしさ」というステレオタイプとしてのジェンダー性に転化し、笑いを創発するところに一時的な連帯を指標する。同時に、客室乗務員の発話が周りの乗客から笑いを引き出していることから、この一言が個人としての客に向けてというよりも、むしろその公共の場として人々が共有する空間に向けた発話だと捉えることができるだろう。

アメリカ社会の公的場面におけるスモールトークでは、時に自己開示や詩的表現を通して「共に笑う」という即興劇的な振る舞いが、擬似的な平等感や連帯性を構築するのだが、こうしたやりとりの場所は会話を通して社会的な理念が構築される実践の場そのものであるといえる。また公共におけるスモールトークのくり返しや平行表現は、やりとりの中に同調のリズムを創出し、互いの発話の間に融合を生み出すところから、一時的な平等性や連帯性を指標し、参加者がそれぞれの利害関係を超えてこの場を共有していることを瞬間的に体感させる仕組みともいえるだろう。Gaudio (2003: 685) が指摘するように、公的な場面でのおしゃべりとは、それ自体が価値の体系化のための実践領域であり、服装、飲食といった実践同様、意図的なモード、そして社会行為としての「カジュアルさ」が具現化された現象なのである。公的場面でのスモールトークも同様に、アメリカ社会における歴史文化的な社会観を実践する上での身構えの中に創発するものなのではないだろうか。

1 本稿は2013年9月開催の第32回社会言語科学学会大会でのワークショップ「雑談の美学を考える—その構造・機能・詩学をめぐって」での発表、および2013年11月の学習院大学人文科学研究所協働研究プロジェクト「異文化コミュニケーションにおけるスタイルの日独英語対照比較研究」研究会での発表「アメリカ社会のスモールトークとその公共性」をもとにしている。

2 *Oxford Dictionary of English*, Second edition revised (2005), Oxford: Oxford University Press.

3 コンビニや花屋は原則的に商品やサービスの提供を目的とする商業施設であり、場の性質上、次の二つの制約をもつ。第一に、こうした場における人々の役割は、予めサービス提供者(店員)とサービス利用者(客)に分別され、それぞれがその役割および規範意識に則って行動することが予測され、期待される。第二に、サービスの提供者と利用者として出会う場の参加者たちは、互いに「当該サービスの達成」という共通の目的遂行のために行動することが前提となる。

4 データが収録されたコンビニと花屋はいずれもオースティン市の目抜き通りに面した店で、午前から夕方時間帯にかけて、店のレジカウンター付近を中心に店員と客のやりとりをビデオ収録している(1996年)。

5 会話の文字化記号は、サックス他(Sacks et al. 1974)を援用した以下の方式を取っている。(.)は会話の合間の一瞬のポーズ、(10.0)は10秒間の沈黙があることを示す。「」は会話が重複する箇所を指す。*Hahaha*のようなイタリック体の箇所は笑い声、または笑いを含んだ発話部分。I know のような下線部は、前後の発話より強勢のある箇所、°no°は前後の発話より弱く小さな声での発話箇所。><ではさまれた箇所は前後の発話より速く話された発話、=は次の=記号との間が途切れなく続いている箇所を指す。発話者の主だった動きやその他の注記については((二重括弧内))に記してある。

6 商品の金額につり銭の額を足して数えた合計が、最初に客が渡した金額と同額になることを口頭で確認しながら返却する米国式のつり銭の返し方。

7 Sidnell (2001: 126) は、デフォルトとしての会話を会話分析における発話交代といった普遍ルールの偏在する場所として捉えると同時に、会話を歴史文化と無関係な(ahistorical, acultural) 行動様式だとする立場を取っている。

8 Private/Publicの対立概念が内包する問題点として McElimmy は、1) 二領域の違いのみが強調され、互いに貫きあう関係性が記述されない、2) この概念が抽象的個人の集合体としての社会的アイデンティティ理論から脱却していない、3) Private/Publicの二分法そのものが、特定の社会観と個人観に立脚した欧米の社会言語学的思想から自由でないことを指摘する(McElimmy 1997: 129)。

参考文献

阿部謹也 2004.『日本人の歴史意識—「世間」という視覚から』岩波新書

Bailey, B. 1997. Communication of respect in intercultural service encounters. *Language in Society* 26: 327-256.

Cameron, D. 2001. *Good to Talk: Living and Working in a Communicative Culture*. London:

- Sage Publications.
- Carbaugh, D. 1990. Communication rules in Donahue discourse. In Carbaugh, D. (ed.) *Cultural Communication and Intercultural Contact*, 119-149. Hillsdale, NJ.: Lawrence Erlbaum Associates.
- Cheepen, C. 1988. *The Predictability of Informal Conversation*. London: Pinter Publishers.
- Coupland, J. (ed.) 2000. *Small Talk*. London: Longman.
- Drew, P. and J. Heritage. (eds.) 1992. *Talk at Work: Interaction in Institutional Settings*. Cambridge: Cambridge University Press.
- DuBois, J. 2007. The stance triangle. In Englebretson, R. (ed), *Stancetaking in Discourse*, 139-182. Amsterdam: John Benjamins.
- Duranti, A. 1997. *Linguistic Anthropology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Eggs, S. and D. Slade. 1997. *Analyzing Casual Conversation*. London: Cassell Publishing.
- Gal, S. 2005. Language ideologies compared: Metaphors of public/private. *Journal of Linguistic Anthropology* 15(1): 23-31.
- Gal, S. and K. Woolard. 2001. *Languages and Publics: The Making of Authority*. Manchester and Northampton, MA: St. Jerome Publishing.
- Gaudio, R. 2003. Coffeetalk: Starbucks™ and the commercialization of casual conversation. *Language in Society* 32: 659-691.
- Goodwin, C. and J. Heritage. 1990. Conversation analysis. *Annual Review of Anthropology* 19: 283-307.
- Hill, J. 2001. Mock Spanish, covert racism, and the (leaky) boundary between public and private spheres. In Gal, S. and K. Woolard (eds.) *Languages and Publics: The Making of Authority*, 83-102. Manchester and Northampton, MA: St. Jerome Publishing.
- 井出里咲子 2005. 「スモールトークとあいさつ: 会話の潤滑油を超えて」 井出祥子・平賀正子 (編) 『講座社会言語科学 1 - 異文化とコミュニケーション』 ひつじ書房, 171-192.
- 井出里咲子 2008. 「スモールトーク」 唐須教光 (編) 『開放系言語学への招待 - 文化・認知・コミュニケーション』 慶応義塾大学出版会, 171-192.
- Jaffe, A. 2009. *Stance*. Oxford: University of Oxford Press.
- Katriel, T. and G. Philipsen. 1981. "What We Need is Communication": 'Communication' as a Cultural Category in some American Speech. *Communication Monographs* 48: 301-317.
- 北村光二 1988. 「コミュニケーション論とは何か」 『季刊人類学』 19 (1): 40-49.
- Laver, J. 1975. Communicative functions of phatic communion. In Kendon A. et al. (eds.), *The Organization of Behavior in Face-to-Face Interaction*, The Hague: Mouton Publishers, 215-238.
- Levinson, S. 1983. *Pragmatics*. Cambridge and New York: Cambridge University Press.
- Lindenfeld, J. 1990. *Speech and Sociability at French Urban Marketplaces*. Amsterdam: John Benjamins.
- Malinowski, B. 1927. The problem of meaning in primitive languages. In Ogden, K. and A. Richards (eds.), *The Meaning of Meaning: A Study of the Influence of Language upon Thought and of the Science of Symbolism*, London: Kegan Paul, Trench, Trubner & Co. Ltd., 296-336.

- McElhinny, B. 1997. Ideologies of public and private language in sociolinguistics, In Wodak R. (ed.), *Gender and Discourse*, 106-139. Sage Publications.
- 三宅和子 2011. 『日本語の対人関係把握と配慮言語行動』 ひつじ書房
- Murata, K. 2013. An empirical cross-cultural study of humor in business meetings in New Zealand and Japan. *Journal of Pragmatics*. (Available online October 18)
- Sacks, H. E., A. Schegloff and G. Jefferson. 1974. A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language* 50: 696-735.
- Schneider, K. P. 1988. *Small Talk: Analysing Phatic Discourse*. Marburg: Hitzeroth.
- Sherzer, J. 2002. *Speech Play and Verbal Art*. Austin, TX.: University of Texas Press.
- Sidnell, J. 2001. Conversational turn-taking in a Caribbean English Creol. *Journal of Pragmatics* 33: 1263-90.
- Tannen, D. 2007. *Talking Voices*. Second edition. Cambridge: Cambridge University Press.